



病院薬剤師の業務

信州大学医学部附属病院薬剤部
神田博仁



信州大学医学部附属病院薬剤部

薬剤部

調剤室

医薬品情報管理室

注射払出室
(注射調剤室)

病棟業務

麻薬管理室

医薬品管理室

治験薬管理室

薬品試験室

製剤室

外来通院治療室

研究室

病棟業務

入院手続き終了直後の全患者さんに対して、入院時初回面談と持参薬鑑別（お薬確認）を行っています。その後、患者さんのベッドサイドでお薬の説明を行ったり、入院中のお薬が有効かつ安全に使用されるよう、副作用やお薬の効果などを医師や看護師と共に管理しています。全ての病棟に担当薬剤師が配置されており、薬の相談も受けています。



薬剤管理指導業務

主に投薬後における患者に対する業務

- ◆薬歴の確認
- ◆処方内容の確認
- ◆ハイリスク薬・麻薬などへの対応
- ◆患者さんへの説明と指導等
- ◆薬剤効果の確認
- ◆副作用の予防・早期発見
- ◆他職種との情報交換・カンファレンス
- ◆退院時指導
- ◆薬剤管理指導記録簿の作成



病棟薬剤業務

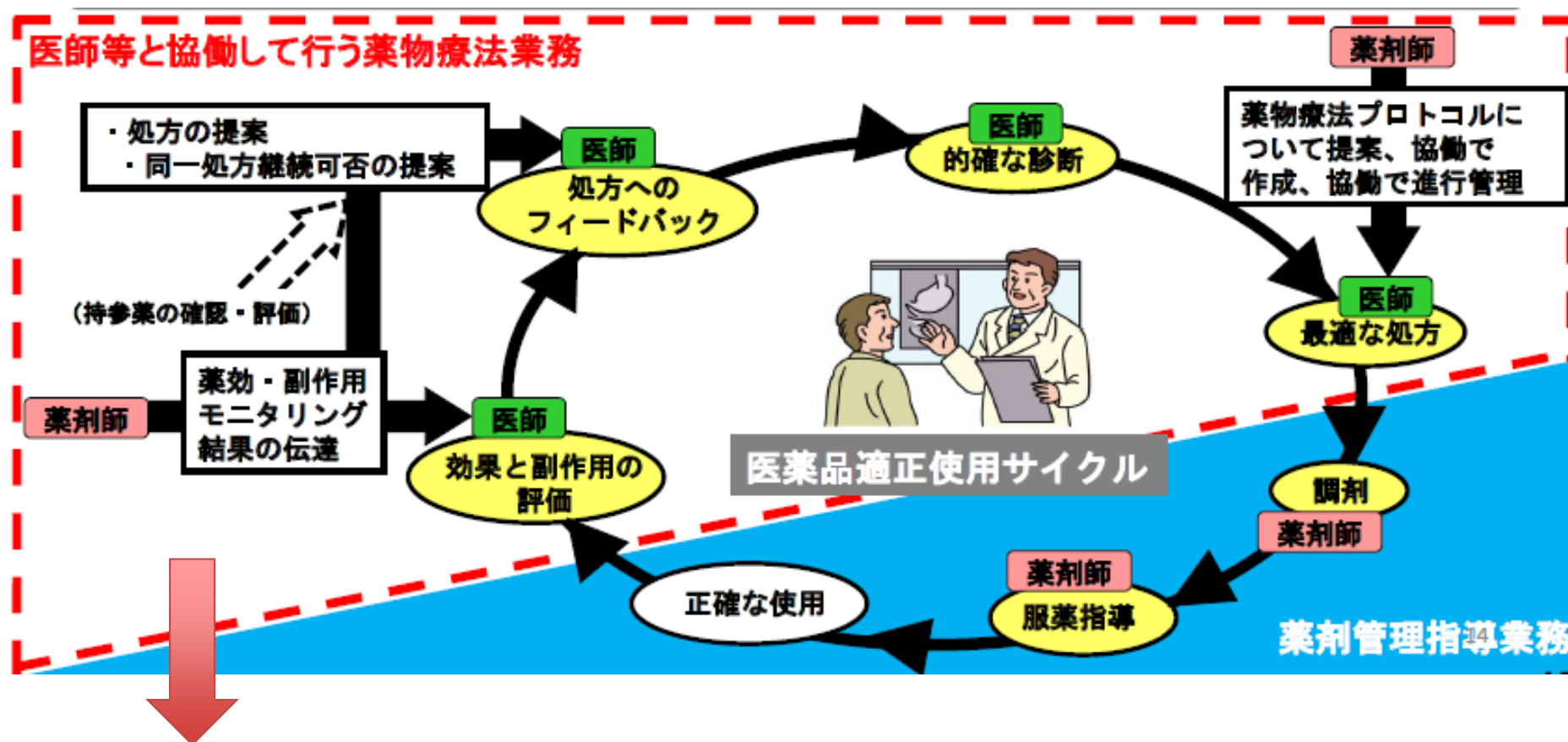
主に投薬前における患者に対する業務、
医薬品の情報及び管理に関する業務、
医療スタッフとのコミュニケーション



- ◆患者背景及び持参薬の確認とその評価に基づく処方設計と提案
- ◆患者状況の把握と処方提案
- ◆医薬品の情報収集と医師へ提供など
- ◆薬剤に関する相談体制の整備
- ◆副作用などによる健康被害が発生した時の対応
- ◆他職種との連携
- ◆抗がん薬などの適切な無菌調製
- ◆病院全体及び病棟における薬品の投与・注射状況把握
- ◆病棟における医薬品の適正な保管・管理

病棟薬剤業務

- 病院薬剤師が病棟において、薬物療法の質の向上を目的として薬剤関連業務（病棟薬剤業務）を実施しています。



病棟薬剤業務

病棟薬剤業務

「薬剤業務」は、従来実施されている「薬剤管理指導業務」とは病棟別のものです。

「病棟薬剤業務」に対して実施加算 1（週1回, 100点）および実施加算 2（1日につき, 80点 平成28年4月より新設）が算定可能です。

※令和2年診療報酬改定で、実施加算1（週1回, **120点**）

実施加算2（1日につき, **100点**）

医薬品の適正使用サイクルの中で、医師が処方するまでの上流部分が「病棟薬剤業務」、個別の患者さんにアプローチするのが「薬剤管理指導業務」です。

「病棟薬剤業務」加算を受けるためには、1週間当たり20時間の病棟薬剤業務を実施する必要があります。

「薬剤管理指導業務」を加えると、病棟担当薬剤師は、通常の勤務時間8時間のうちのほとんどの時間は病棟で業務をすることになります。

病棟薬剤業務の例

入院患者の持参薬鑑別

各種カンファレンス・回診への参加

処方（内服・注射）の確認・相互作用チェック

注射ワークシートを用いた配合変化及びルートチェック

他のメディカルスタッフへの情報提供と相談応需 等



病棟での持参薬鑑別の様子



看護師との薬剤カンファレンス

病棟薬剤業務日誌

平成29年12月11日

病棟名： 西5

病棟専任薬剤師名： 西田 昌子

1 この病棟におけるこの日の病棟薬剤業務の実施時間

6:45

2 業務時間・業務内容・実施薬剤師名

No	業務時間帯	時間	業務内容コード	実施薬剤師名	場所
1	08:30 - 10:30	2:00	② ③	西田 昌子	病棟
2	12:30 - 13:30	1:00	⑦-1	西田 昌子	病棟
3	13:30 - 14:00	0:30	⑦-2	西田 昌子	薬剤部(薬剤室)
4	13:30 - 16:15	2:45	① ② ③	西田 昌子	病棟
5	16:45 - 17:15	0:30	① ⑥	西田 昌子	病棟
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					

※ 実施した業務の内容を次の業務の番号から選択して「業務内容」欄へ記入するとともに、当該業務の実施に要した時間を「業務時間」欄へ、実施した薬剤師の氏名を「実施薬剤師名」欄へ記入すること。
業務の内容について⑦を選択した場合には、その内容を具体的に記載すること。

業務コード	業務内容
①	医薬品の投薬・注射状況の把握
②	医薬品の医薬品安全性情報等の把握及び周知並びに医療従事者からの相談応答
③	入院時の持参薬の確認及び服薬計画の提案
④	2種以上の薬剤を同時に投与する場合における投与前の相互作用の確認
⑤	患者等に対するハイリスク薬等に係る投与前の詳細な説明
⑥	薬剤の投与にあたり、流量又は投与量の計算等の実施
⑦	その他（業務内容を具体的に記入すること。）
⑦-1	その他（病棟カンファレンス・回診）
⑦-2	その他（抗がん剤無菌調製）
⑦-3	その他（病棟における医薬品の管理）
⑦-4	その他（TDM・薬物血中濃度解析/処方提案）

※ 当該病棟以外の場所で実施した病棟薬剤業務についても、実施場所とともに記載すること。

3 その他

備 考
薬剤鑑別7件。 情報提供5件：処方カレンダー対応0件。 オキファスト注からオキシコンチン錠への切り替え方法について医師に情報提供。腎機能低下患者のメロベネム投与量について医師に情報提供。CVポート挿入患者がプラザキサを服用していたため、休薬期間について医師に情報提供。熱発患者のMEPの投与量について医師に情報提供。インフルエンザワクチンで皮疹出現患者のアレルギー登録について医師と相談。 病棟カンファレンス： 肝移植カンファレンス12:30～13:30

集中治療室における薬剤師とは？

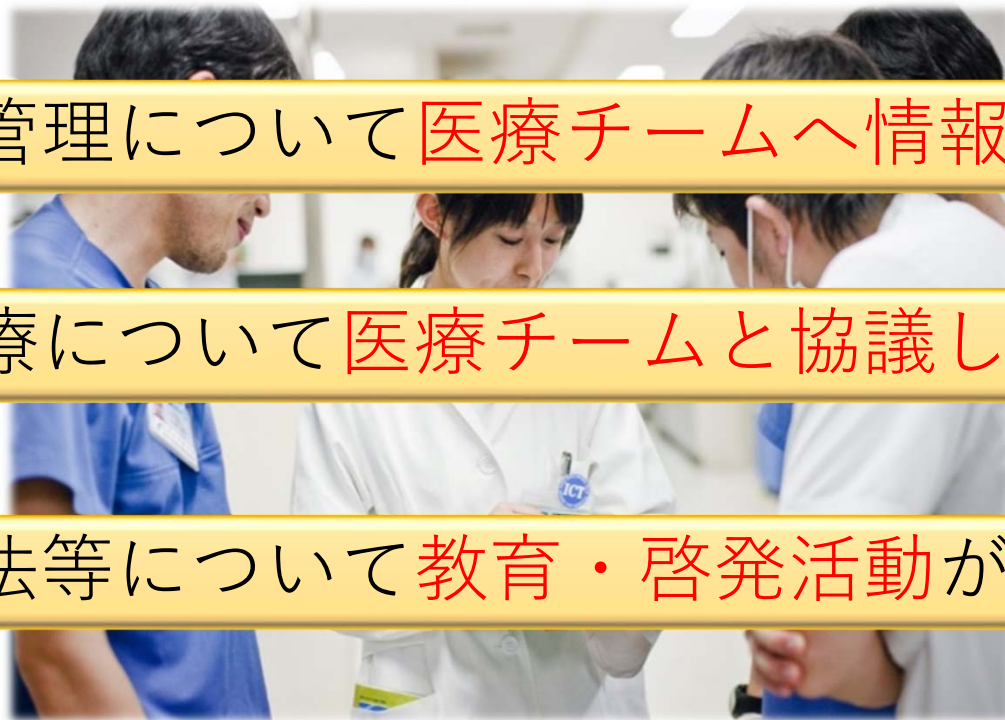
多職種と連携をとり医療チームの一員として参画

薬学的管理について医療チームへ情報提供

薬物治療について医療チームと協議し提案

薬物療法等について教育・啓発活動ができる

救急医療ないし集中治療に関する研究



高度救命救急センター担当薬剤師の業務

- ◎高度救命救急センター担当薬剤師は3人
- ◎DI室との兼任2人、DI室と感染制御室との兼任1人
- ◎1日～3日毎に交代で高度救命救急センター業務を実施



 1人:救急病棟業務
2人:DI業務

 3人:DI業務、救急担当薬剤師カンファレンス
救急からの問い合わせ対応

 1人:救急ICU業務
2人:DI業務

高度救命救急センター担当薬剤師の業務

◎午前中 8時15分～11時30分

- ① 朝カンファレンスに参加
- ② 回診に同行
- ③ 注射薬と内服薬の指示簿の確認
- ④ 配合変化、投与速度、用法用量、点滴ルートの確認
- ⑤ 薬剤の選択や投与量等について医師と検討
(必要に応じ処方提案)
- ⑥ 服薬指導(副作用の自覚症状の有無等を確認)
- ⑦ CPA患者来院時のERにおける治療支援
- ⑧ 中毒患者来院時の対応
- ⑨ スタッフからの問い合わせ対応 等

◎午後 14時30分～17時15分

上記③～⑨ 等

医薬品情報

医薬品情報管理室では・・医薬品を適正に使用するために医薬品に関する情報を収集・評価し、その情報を医師などの医療従事者や患者さんに提供することが主な業務です。

◆情報の収集・管理

各医薬品に関する新しい情報、その他医薬品を使用する上で必要となる情報を迅速に収集し、情報評価・保管・管理

厚生労働省から発表される副作用情報、製薬会社から伝達される各種情報、医薬品に関する書籍や学術雑誌 など

最近では、医薬品リスク管理計画(RMP)も「特定されたリスク」「潜在的なリスク」を患者 モニタリング、副作用原因の究明等々に活用されています。

◆院内イントラネットやインターネットを利用して検索できるデータベースなど様々な情報源を整備

◆医療従事者や患者からの医薬品に関する質問に対する情報提供

◆新規収載医薬品のヒアリング
(医薬品評価)

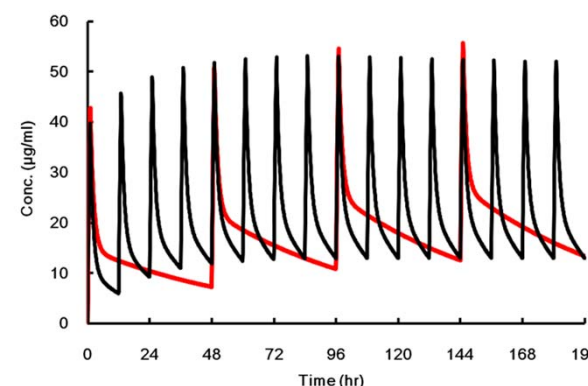
◆後発医薬品(ジェネリック医薬品)の選定

◆薬事委員会の開催



薬品試験室

薬物血中濃度測定と薬の体内での変動解析を中心に、個々の患者さんの投与量、投与法の設定、中毒の原因薬毒物の分析などを行っています。



TDM業務の位置付け（日本化学療法学会TDM標準化ワーキンググループ）

「薬物血中濃度をはじめ，治療効果や副作用に関するさまざまな因子をモニタリングしながら，それぞれの患者に個別化した薬物投与を行うTDMは，薬剤師の専門性を発揮し，治療に貢献するうえで極めて重要な技能である」

TDMは臨床薬剤業務を行うにあたって不可欠な技術

医療安全

医薬品の適正使用に加えて，医薬品が関わる医療事故や医療費削減の面から，薬の専門家，リスクマネージャーとしての薬剤師の役割と責任が明確になっています。



リスクマネージャーとしての病院薬剤師

近年，極めて効果の優れた医薬品が数多く開発されていますが，反面，重篤な副作用の発現や複雑な使用方法など，薬物療法を取り巻く環境が大きく変化し，医療事故の約半数は医薬品関連であるともいわれています。



このような中で，病院薬剤師には，薬物療法の安全性を確保するための，リスクマネージャーとしての役割が期待されています。

病院薬剤師によるリスクマネジメント

内服・外用薬 および注射薬 の処方箋

- ・ 薬学的な見地から過量，重複，相互作用，禁忌などを検討
- ・ 必要に応じて疑義照会，処方内容を変更

医薬品管理

- ・ 毒薬や劇薬，麻薬，向精神薬，血液製剤をはじめとした院内医薬品
- ・ 盗難や取り間違えが無いよう管理
- ・ 細菌汚染や光・高温による変質を防止するなど品質管理

高カロリー輸液 や抗がん剤など のハイリスクな 注射薬

- ・ 薬剤師が無菌的に混合調製

医薬品情報 提供

- ・ 医師の処方時等，医療スタッフに対し，安全で適正に行えるよう必要な医薬品情報を提供
- ・ 持参薬や市販薬も含めて患者さん毎に薬歴を作成し，他の医療スタッフと情報を共有

薬学的管理

- ・ 患者さんへ薬の作用や注意点などを説明
- ・ フィジカルアセスメントを通じた全身の観察，検査データの検証
→ 医薬品による副作用の早期発見，防止

安全対策

- ・ 不幸にして発生した副作用や医療事故
→ 院内委員会 等で検討，再発防止に向けた対策立案

チーム医療の推進

チーム医療とは

- ・ 多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提とし、目的と情報を共有し、業務を分担するとともに、互いに連携・補完し合い、患者さんの状況に的確に対応した医療を提供すること

「医療の質の向上及び医療安全の確保の観点から、チーム医療において薬剤の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加することが非常に有益である」

「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」
(医政発0430第1号平成22年4月30日)

チーム医療における薬剤師の業務

1. 薬剤の種類，投与量，投与方法，投与期間等の変更や検査のオーダーについて，医師・薬剤師等により事前に作成・合意されたプロトコールに基づき，専門的知見の活用を通じて，医師等と協働して実施すること。
2. 薬剤選択，投与量，投与方法，投与期間等について，医師に対し，積極的に処方提案すること。
3. 薬物療法を受けている患者（在宅の患者を含む。）に対し，薬学的管理（患者の副作用の状況の把握，服薬指導等）を行うこと。
4. 薬物の血中濃度や副作用のモニタリング等に基づき，副作用の発現状況や有効性の確認を行うとともに，医師に対し，必要に応じて薬剤の変更等を提案すること。
5. 薬物療法の経過等を確認した上で，医師に対し，前回の処方内容と同一の内容の処方提案すること。

チーム医療における薬剤師の業務

6. 外来化学療法を受けている患者に対し、医師等と協働してインフォームドコンセントを実施するとともに、薬学的管理を行うこと。
7. 入院患者の持参薬の内容を確認した上で、医師に対し、服薬計画を提案するなど、当該患者に対する薬学的管理を行うこと。
8. 定期的に患者の副作用の発現状況の確認等を行うため、処方内容を分割して調剤すること。
9. 抗がん剤等の適切な無菌調製を行うこと。

また、薬剤師以外の医療スタッフが、それぞれの専門性を活かして薬剤に関する業務を行う場合においても、医療安全の確保に万全を期す観点から、薬剤師の助言を必要とする場面が想定されることから、薬剤の専門家として各医療スタッフからの相談に応じることができる体制を整えることが望まれる。

外来化学療法室

外来で通院して抗がん剤の治療をする患者さんの抗がん剤の調製や治療計画のチェックを行っています。
また、安心して治療を行ってもらえるように薬剤の説明も行います。

副作用が避けられない治療も多く、それらの副作用を軽減するような薬を提案したり、患者さんのおくすり相談の窓口にもなっています。

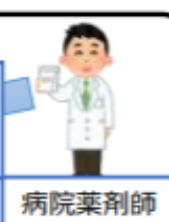


外来がん化学療法の質向上のための総合的な取組

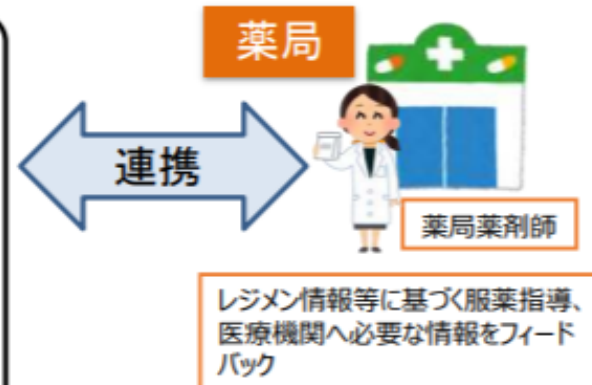
医療機関



レジメン（治療内容）を提供、他の医療機関に提示するよう指導



患者の状態に合わせた栄養食事指導



質の高い外来がん化学療法の評価

（新）連携充実加算 150点（月1回）

- 患者にレジメン（治療内容）を提供し、患者の状態を踏まえた必要な指導を行うとともに、地域の薬局薬剤師を対象とした研修会の実施等の連携体制を整備している場合の評価を新設。

外来栄養食事指導料の評価の見直し

- 外来化学療法の患者は、副作用による体調不良等により、栄養食事指導を計画的に実施することができないことから、患者個々の状況に合わせたきめ細やかな栄養管理が継続的に実施できるよう、外来栄養食事指導料について、要件を見直す。

薬局でのレジメンを活用した薬学的管理等の評価

（新）特定薬剤管理指導加算2 100点（月1回）

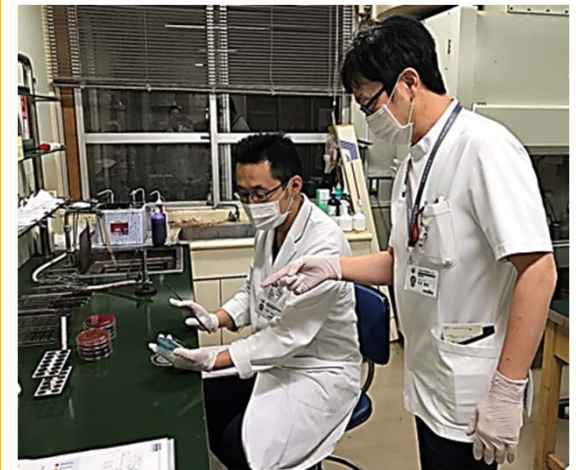
以下の取組を評価

- 患者のレジメン等を把握した上で必要な服薬指導を実施
- 次回の診療時までの患者の状況を確認し、その結果を医療機関に情報提供

病院薬剤師が関わるチーム医療

◆多職種連携チーム

- 感染制御チーム (ICT)
- 抗菌薬適正使用支援チーム (AST)
- 栄養サポートチーム (NST)
- 緩和ケアチーム
- がん化学療法支援チーム
- 摂食嚥下チーム
- 褥瘡対策チーム
- 糖尿病サポートチーム
- 精神科リエゾンチーム
- 妊娠と薬外来
- 吸入指導連携 など



ICT/AST活動

調剤

処方せんによる外来および入院患者の内服薬・外用薬の調剤を行っています。処方せんの内容について、飲み合わせ・副作用・量・飲み方などをチェックを行い、患者さんひとりひとりに適した形で調剤します。
より安全な薬の使用ができるよう努めています。



調剤

薬剤師法 第24条（処方せん中の疑義）

薬剤師は、処方せん中に疑わしい点があるときは、その処方せんを交付した医師、歯科医師又は獣医師に問い合わせ、その疑わしい点を確認した後でなければ、これによって調剤してはならない。

処方箋 受付

- ・ オーダリングシステム等により医師が処方をコンピューターで入力すると処方箋が調剤室に出力されます。また、同時に薬袋等も発行されます。

処方 監査

- ・ 薬剤師が処方箋の記載事項に不備がないことを確認した後、処方内容が適切かどうかを確認します。
* 剤形・用法・用量・相互作用・投与禁忌・重複投与 等の確認

疑義 照会

- ・ 必要に応じて医師に確認します。

調剤

- ・ 錠剤、散剤、水剤、外用剤など、処方せんに基づきそれぞれ調剤します。

鑑査

- ・ 別の薬剤師が、調剤された薬を再び確認します。
 - ・ 正しい薬が調剤されていること
 - ・ 薬袋の記載事項が適切であること
 - ・ 処方薬の数量、秤取量が正しいこと
 - ・ 処方薬の品質が保たれていること など

投薬

- ・ 外来の患者さんには、窓口で薬剤を交付します。
お薬の説明書を活用し、薬効、副作用、服用（使用）上の注意等の情報提供を行います。



オーダー番号：50803072

高齢 新規 外来 処方せん



引換券番号：90

投薬開始日：平成27年 1月 9日

科 名： 呼吸器感染症内科

保険医師名：土屋 広行

フリガナ：AAA AAA

患者氏名：AAA AAA 様

生年月日：昭和 9年12月22日 年齢：80才0ヵ月

患者番号：0000448 性別：男

処方入力日時：平成27年 1月 9日 21:44

処方出力日時：平成27年 1月 9日 21:45

棚番

刻印

臨床検査値の表記

ハイリスク薬のミニ薬歴

薬剤情報提供可

同意取得日 20141128

投与開始日 20141128

投与終了日 20151128

治験終了日 20151228

PT-INR:1.14 090611 1.00 080625 1.00 080502 3.10 060910 検査7/7 060829

松澤 直樹

2010/9/29

[1型糖尿病]

松澤 直樹

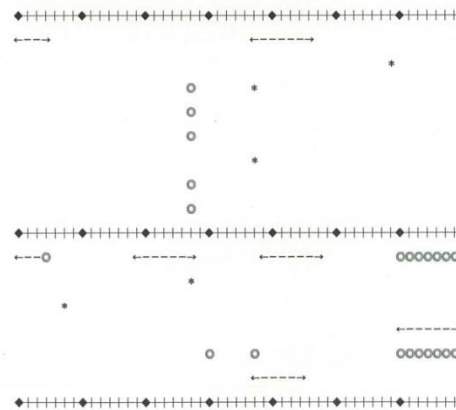
2010/9/29

[癩風]

アマリール錠1mg
アルブミン5%静注12.5g/250mL
イグザレト錠10mg
イグザレト錠15mg
エリキウス錠5mg
持参：グラセブターカプセル1mg
サムスカ錠15mg
サムスカ錠7.5mg

ディーエスワン配合00錠T20
バリキサ錠450mg
フェアストン錠40mg
ユーエフティ配合カプセルT100
ワーファリン錠1mg
ワーファリン錠0.5mg

11/28 12/05 12/12 12/19 12/26 01/02 01/09 01/16



Rp 2 1/201 レバミピド錠100mg「EMECJ」(Δコスタ後発) 1回量(上限)1回量が1回量最大1錠を上まわっています。

以下余白

過量投与、併用禁忌薬剤処方の際の表記

代行者名 (

オーダー番号：50803072

1/1 ページ

調剤者 (1)	調剤者 (2)	鑑査者 (1)	鑑査者 (2)



注射薬調剤

注射調剤室では入院患者さんに使用する注射薬を1日分（1施用）ずつ専用カートに取り揃えています。



注射処方箋 監査

投与量・投与方法・投与速度・混合による
化学変化 など

注射薬 取り揃え

チェックを行った注射処方箋に基づいて、
患者さん一人分ずつ注射薬を取り揃えています。

鑑査

別の薬剤師が鑑査を行います。

病棟払い出し

病棟へ注射薬を送ると同時に、医師や看護師へ注射薬の適正使用に関する情報提供を行います。

注射せん

注射せん 入院注射		新規	再発行
病棟	ICU ICU	出力日時	2012年 4月16日 14:19
患者番号	000000000	投与日	2012年 4月17日
患者氏名	〇〇〇〇様	診療科	心臓血管外科
生年月日	昭和19年 4月15日 (66歳0ヵ月) 女	医師氏名	〇〇〇〇
		オーダ番号	0003832311120417
コース	身長 0 体重 0 体表面積 0		
処方番号	手技/商品名	数量/単位	
RP 1	新規 点滴ポンプ用主 ハンブ注射用1000ug ミズ(注射用水) 100mL 1日1回指定なし 1回目 時間あたり 2 ml/h 指示特1番目 ICJ	2000 μ g 50 mL	医師:〇〇〇〇 98662522
RP 2	新規 I V H ヴィーン3G注 500mL ガスター注射液20mg 2mL 1日1回指定なし 1回目 時間あたり 40 ml/h 指示特1番目 ICJ	500 mL 20 mg	医師:〇〇〇〇 98662523
RP 3	新規 点滴ポンプ用主 セファメジン α 注射用1g セイシヨク (生食) 20mL 1日1回指定なし 朝 指示特1番目 ICJ	1 g 20 mL	医師:〇〇〇〇 98662524
RP 4	新規 点滴ポンプ用主 セファメジン α 注射用1g セイシヨク (生食) 20mL 1日1回指定なし 夕 指示特1番目 ICJ	1 g 20 mL	医師:〇〇〇〇 98662525
RP 5	新規 点滴ポンプ用主 ヴィーン3G注 500mL 1日1回指定なし 1回目 時間あたり 40 ml/h 指示特1番目 ICJ	500 mL	医師:〇〇〇〇 98662526
【成分情報】	Na 100.6 mEq Mg 10 mEq 総質合計 50 g 総熱量 200 cal	Ca 0 mEq Cl 80.2 g 総質合計 0 g NPC/N 0	K 34 mEq P 0 mg アミノ酸 0 総水分量 1092 mL
【処方コメント】	eGFR: 43 120416 42 120415 52 120415		
【患者コメント】	急性大動脈解離 Stanford A		
【抽出薬品】	ヴィーン3G注 500mL ミズ(注射用水) 100mL ガスター注射液20mg 2mL セイシヨク (生食) 20mL セファメジン α 注射用1g ハンブ注射用1000ug	抽出合計 2 瓶 1 瓶 1 管 2 管 2 瓶 2 瓶	
以下余白			
3桁処方№	21065547	シフト№	337
印字日時	2012年 4月16日 22:25	ページ	1 / 1
信州大学医学部附属病院			

注射薬せんの記載項目

- ①患者氏名
- ②性別
- ③生年月日（年齢）
- ④投与開始日
- ⑤処方せん発行日
- ⑥処方医師名
- ⑦薬品名（規格も含め）
- ⑧投与量
- ⑨投与速度
- ⑩投与時間
- ⑪投与経路



注射薬調剤





注射薬1施用毎のセット

薬剤師



麻酔科医

7:30 早朝業務

当日使用分の麻薬、薬剤セット払出し

8:30 午前業務

吸入麻酔薬在庫確認

当日、翌日使用分の薬剤セット準備

使用済み薬剤の処理（麻薬・毒薬・向精神薬）

硬膜外持続注入、持続静脈内投与薬剤の調製

手術部麻薬帳簿管理

医師、看護師へ情報提供

12:30 午後業務

当日、翌日使用分の薬剤セット準備

使用済み薬剤の処理（麻薬・毒薬・向精神薬）

硬膜外持続注入、持続静脈内投与薬剤の調製

手術部麻薬帳簿管理

医師、看護師へ情報提供

麻薬金庫内残数、持ち出し数、使用量確認

薬剤部麻薬管理室へ空アンプル／バイアルを返却

手術部麻薬金庫へ麻薬補充・麻薬在庫確認

17:00

注射薬品棚



麻薬金庫

手術室常駐薬剤師タイムスケジュールおよび業務内容

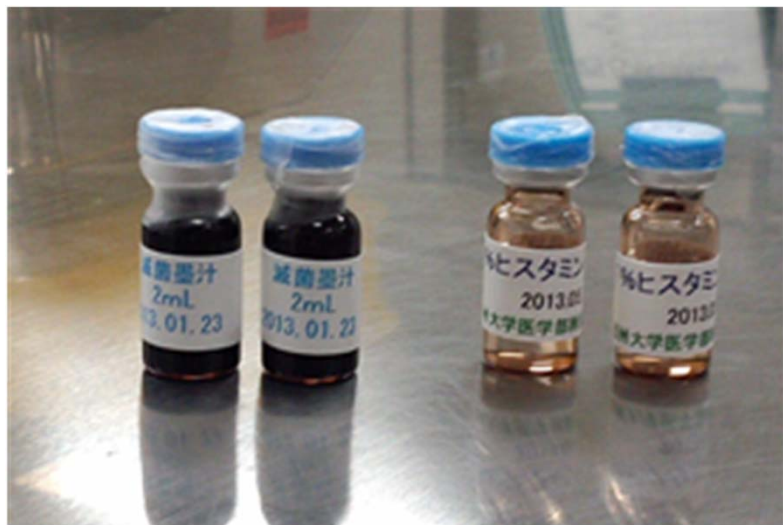
製剤

院内製剤の調製

- ・ 患者さんの病態やニーズに対応するために，医師の求めに応じて病院内で薬剤師により調製され，それぞれの病院内の患者さんに限って用いられる製剤
 - ・ 個々の患者さんに最適な薬剤を，最適な投与経路，剤形で投与するのに，市販の医薬品では対応できない薬の調製
 - ・ 院内で大量に使用する薬などを一括して調製
 - ・ 注射薬をはじめ無菌的に調製する必要のある薬を無菌製剤室で調製
 - ・ 臨床研究に用いられる製剤の依頼が増加



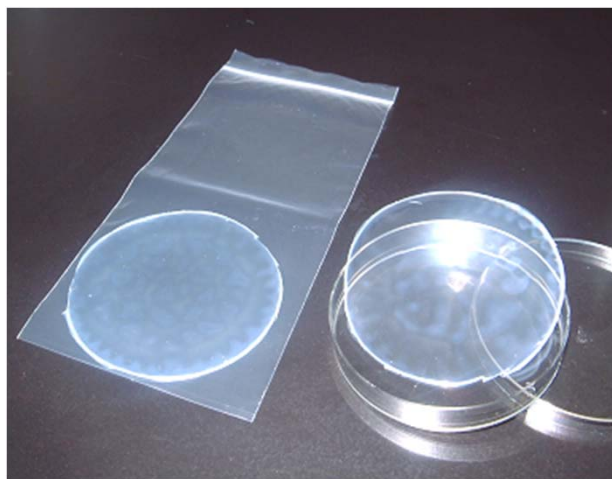
製剤室で効率的かつ安全に調製を行うことは、医療過誤や院内感染の防止にもつながります。



無菌製剤



院内製剤の調製(実務実習)



ADフィルム



アズレンアイスボール

無菌調製：注射薬混合

患者さんに安全な治療を提供するため、
高カロリー輸液や化学療法外来で使用する
抗がん剤を無菌の環境下で混合します。

高カロリー輸液

- ・ 糖，アミノ酸，ビタミン，
電解質などで構成
- ・ 「中心静脈栄養（TPN）」に
用いる輸液剤



外来通院治療室（信州がんセンター）

- ・ 抗がん剤による治療を行う専門外来
- ・ 薬剤師は、処方せんの薬用量，投与
期間，投与方法等の確認を行った上で，
混合調製



医薬品管理



適切な発注・ 在庫管理

- ・ 医薬品の品質・経済性を含めた管理
後発医薬品の増加、使用期限切れ薬剤
- ・ 医薬品の使用前の、容器やふた等の損壊や異物混入等がないかの確認
- ・ ヒューマンエラーで使用する可能性も
- ・ 在庫数・アイテム数が多い
→ 取り違いリスク

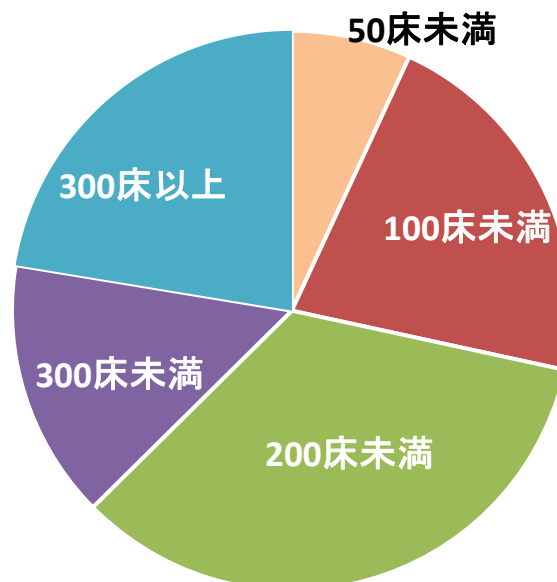
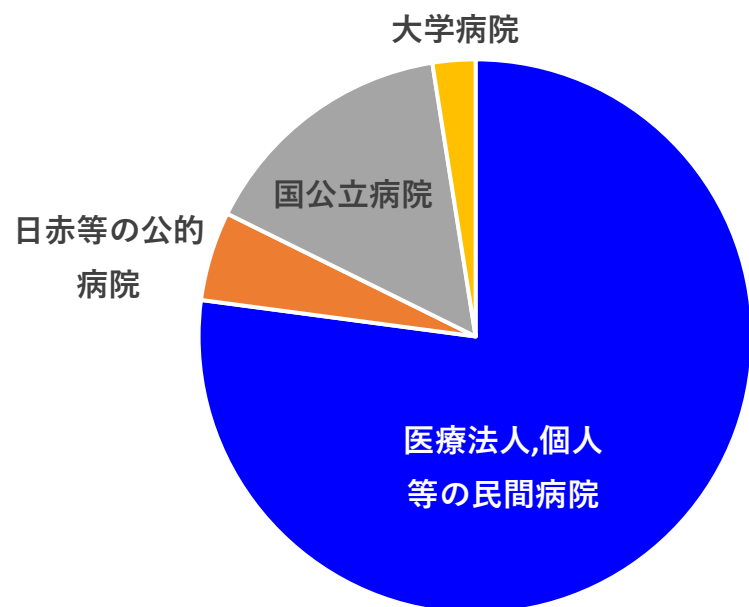
医療用麻薬・覚せい 剤原料の管理

- ・ 厳重な保管の下に出納記録

特定生物由来製品の 管理

- ・ 特定生物由来製品
(輸血用血液製剤, 血漿分画製剤等)
- ・ 入庫・施用の記録・管理
- ・ 管理簿: 20年間の保管管理が義務

病院薬剤師の所属施設は？



全国の病院, 診療所に勤務する薬剤師の8割近くが日本病院薬剤師会に入会していますが, 会員施設(6566施設)の約60%が200床未満の民間中小病院です。(平成27年6月現在)

多くの病院薬剤師が中小病院で活躍しています。

中小病院では病棟活動はできているの??

実際に勤務されている現職薬剤師の声

中小病院ってどんなところ

- ・「専門性の高い少数入院病床群の施設」
- ・「地域密着型, 少人数入院対応病院」

薬剤部がコンパクトで入職当初より薬剤師が行う業務全般に携わり活躍することができます。

診療部, 看護部と壁が薄く, チーム医療が行われている施設が多くあります。

病院薬剤師の専門性

近年の医薬品の増加や多様な薬物療法の進歩に伴い、薬剤師に求められる知識・技能などが以前と比べて格段に増加しています。

現在、薬剤師の業務内容は以前と比べて細分化・高度化しています。

薬剤師は薬物が関与するあらゆる業務に幅広く目を向けなければならず、薬剤師業務全般を行うことができる**ジェネラリスト**としての存在でなければなりません。

医療チームのなかにそのような薬剤師が存在してはじめて、最適な薬物療法を患者さんに提供することが可能となります。



病院薬剤師



総合力実践の場が病院薬剤師

本当のチーム医療がここにある

「薬のあるところに薬剤師あり」

薬剤師になって良かった
その瞬間を感じてみませんか？

仕事の厳しさと喜びを